
神選～GotRing～

時雪崩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神選～GotRing～

【NZコード】

N0942D

【作者名】

時雪崩

【あらすじ】

神が選んだ指輪・・・それは少しの人間にしか使えない特別な指輪その指輪の使用者のスバル今ここに始まる神選の話！！！どうぞよろしく！！！

1 始まり?

この世界は神がまつわれていて信じる者は信じたり、妖精がいたり、仙人がいたりなどまあ変な世界です。

人間は働いたり、狩に行ったり、商売したりなど色々頑張っています
王は国民のためにたぶん色々頑張っています

ちなみにこの物語の主人公?はそここの俺スバルだ。

年は15歳、身長はちょっと小さめの160cm、得意なことは勉強などのめんどくさいこと意外のことならんでもすきだ、まあいたってどこにでもいそうな子供です。

俺の家は神社で父と母と兄とじいちゃんの5人暮らしです。

毎日お父さんからみつちり神社関係のことを、仕込まれているけど、ほとんどサボっています。

なぜかとゆうと、それは2つ理由があるんだけど、一つ目は、俺には兄がいるからいちを、俺はあとを継がなくて良いってこと。

2つ目は、じいちゃんが俺を旅に出したくて、毎日俺はじいちゃんの剣の稽古にも頑張っています（旅は出たいけど魔物とかあるからなるべくは行きたくないけど・・・）

まあそれも、4日後に迫った、俺の15歳の誕生日で行くか行かないかが決まります。

それまではゆっくり過ごしたいと思います。

次の日

朝起きると家族が全員居間でご飯を食べていた。

「おはよう、」と飯出来どるよ

母がそつゆつてきた。

それにつられてみんなが「おはよう」といつてきた。

そして俺も「おはよう」といつた。

母がご飯を持ってきた。

スバルの大好きなご飯は和風だ。

スバルは魚の骨まで食べた。

スバルが食べ終わると、父が「明日の朝に家族会議をするからなるべく早くかえって早く寝なさい」といつてきました。

「はーい」といつてスバルは外に出た。

スバルの家はつきに1回家族会議が開かれる。

スバルは靴を履いて外に出ると、そこには友達のサクが立っていた。

サクはスバルと同じ年で、身長は170cmくらいで俺よりも高い。

サクの家は紋印術もんいんじゅつがとてもうまい家で有名だ。

紋印術とはまあ紋印を書いたらそれなりのものが出るということのらしい。

まあとにかく魔法が使えるということだ。

おまけにサクはすぐ頭がいいなぜか知らないけどものすごくいい、でも運動のほうはあまり良いとはいえないけど・・・

賢者様に未来をかえる男とかゆわれたりもしたらしく。

でも村の人があちこち旅に出るといつてもまったく旅に出る気はないらしい。

まあ俺の1番の仲良しの友達だ。

「おーいサク遊びばっせ」

サクは振り返ると

「何だスバルか」

「なんだよのりわりいなあ」

「サクはため息をつくと

「遊ばないんだつたら帰るよ」

「スバルは二コと笑うと

「じゃチャンバラしようぜ」

「サクはまたため息をつくと

「いや、スバル強すぎだもん」

「じゃなにしたいんだよ」

「今度はサクが二コと笑うと

「昼寝」

「つまんねええじゃん昼寝とか」

「サクは頭をかくと

「もーいいよチャンバラで」

「スバルは二コ二コして

「じゃ木刀持つてくるな」

「じゃ僕は先に広場にいつとくよ」

「おう、わかった」

スバルは木刀をもつて5分後スバルは広場に行つた。

広場にはサクが座つていた

「ほらよ木刀、ちゃんと手抜くからよ」

「サクは立ち上ると

「わかつたよ、まいつたつてゆつたら負けだよね」

「おうじや始め」

2人は木刀を振り始めた

『バキ カン 痛 まだまだ ウララー カン ボコ ポコ まい
つた』

まいつたとゆつたのはサクだった。

サクの頭の上には小さいタンコブができていた。

「痛つて、やっぱり負けたじゃ ないかだからいやだつたんだよう

「さくはちょっとすねている

「まあそつゆうなよ結構お前強くなつていたぜ」

「はーはー、どうもありがと。で、どうするのもう一試合っ」

「うーんお前もういやだろ。次はお前に任せせるよまかせる」

「じゃ野蛇草原で昼寝」

スバルはサクの機嫌を直すために昼寝に付き合つた。

「わかつたたよ、じゃ行こば」

サクはさつきまではすねていたけど昼寝となるといつも一回していった。

2人は木刀とヘルメットを元に戻してから野蛇草原に行つた。

「相変わらずここ寒いな」

「そつかな?僕はいいといひだと思つけど・・・」

「サクは横になると

「じゃさつそくお休み」

サクは3分もしないうちに寝てしまつた。

イビキもかかず爆睡してゐる。

スバルは寝ようとしたけど、なかなか寝られなかつた

「どうしようかな、どこかウロウロしごこつかな」

スバルは考えて草原をウロウロすることにした

「サクは2時間後におきるとしてあと2時間どうしようかな」

するとスバルの昔の記憶に竹やぶが創造された

「そうだ、あの竹やぶに行こう 修行できるかもしれないし」

スバルは草原の端っこにある竹やぶに行つた

part1 始まり？（後書き）

初めて書いたのであまりこい作品じゃないかもしませんがこれからも頑張っていきたいと思うのでもよろしくお願いします

part2 神の指輪（前書き）

スバルが暇で竹やぶに入ちゃいます
そこであつた人は・・・

2 指輪

中に入ると竹がいっぱい生えていた

「ここ修行できそうだな。何か切る物ないかな?」

スバルは切る物を探すために、竹やぶの中をどんどん進んでいくと一軒のボロボロの木造の家が建っていた

「そうだこの中に切る物があるかもしれない。ここ誰もいらないみたいだし」

スバルは家の 中に入ると予想通り、中には誰もいなかつた
床や壁もあちこち壊れていた

「ボロボロだなこの家」

文句を言いながら家の 中をうろついたりすると、戸の間から光が漏れ
ている部屋があつた

「幽霊じゃないよな・・・」

スバルはそこに恐る恐る入っていった

その光の部屋に入ると一つの仏壇があつた

仏壇には光る箱が飾っていた

「よかつた、幽霊じゃなかつた。でも何だこれは?」

スバルはその箱に手を触れようとすると

「誰じやそこにあるのは」

スバルの心臓が止まるかと思つぐらに大きな声だった

「はいー」

裏声だった

「そこにあるのは誰じや素直に出て來い。出てこないのじゃつたら殺すぞ」

スバルは手を上にあげ、ゆっくり声のほうに出て行つた
そこにはいかにもおじいちゃんつて感じの人人がいた

白いひげを生やし頭の毛はつむつむで服も茶色い服を着ていた

「ほう餓鬼が何のよつじや」

「えーっとちよつと迷子になつて、ちようど家があつて、のどが渴いて飲ましてもらおうかなあつておもつて・・・」

スバルは思いつきり嘘をついていた

「それなら何で、台所にいないのじや」

おじいさんは鋭かつた

「えーっとものすゞい光を放つてこゝがあつたので氣になつて・・・」

これは本当のこと

「何じや、あの指輪が光つておるのか」

おじいさんはビックリしていた

「ちょっと、そこの餓鬼こい」

（餓鬼はひどこよ・・・）

「はい」

声は小さかつた

スバルはポツポツと歩いつた

おじいさんが光る部屋の中に入ると

「これは驚いた、指輪が光つておる。こつから光つておつたのじや。」

「わかりませんけど」

「そつか、ついに来たのじやな。ほれこの指輪を持つてかえりなさい」

スバルの手に指輪の入つた箱が乗せられると光は収まつた。

「この指輪はお前にあげよつ」

スバルはちょっと驚いた。

「この指輪はなんですか？」

「わしもしらん。でも昔、来た旅人にもりつてひづめられた」

『この指輪が光つたらその人は継承者です。継承者がきたら何事も無く指輪をあげてください。そして利き手の人差し指にはめるようについてください。あと他の指輪も集めてください。最後に、この指輪はインパクトだ』とゆってこの家を後にしたんじゃ。

「まあとにかく指してみなさい」

スバルは左利きなので左の人差し指に指輪をさした。

指輪は黄色でとてもきれいな指輪だった。

「よく似合つておるの。指輪の意味はわからんがずっと持つていれば何か分かるかもな。じゃサヨナラジヤ」

「ちょっとまってください。この指輪どうしたら良いんですか?」「わしもわからんのじや。まあ後は頑張つてくれ。あとその指輪売つたりするのではないか?」

そうゆうとおじいさんは違う部屋に行ってしまった。

スバルの頭の中は真っ白になつた。

でもしようがなく外に出た。

真っ白の状態だった。

でも頭の中にサクのことを思い出した。

「そろそろサクの所かえつてやらないと、あいつ悲しむだらうな、よし行くか」

スバルは走つてサクの所へいった。

サクのところへつづくとサクはまだ寝ていた

「サク、そろそろ起きないと、夜寝れなくなるぞ」

「ふあおはよう。何時間くらい寝てた?」

「うーん2時間30分つてどこかな」

「そつかじやかえろつか。ふあー」

「そうだな」

「あれ?スバルその指輪どうしたの?」

サクは寝起きでまだボーッとしていた

スバルはさつきのことを話した

「へえ変わってるね。なんだろうねその指輪？」

「さあ、何か『この指輪はインパクトだ』らしいぜ」

「ふふふふ変だね、まあ僕の家の本で調べてみるよ」

「おう、頼む」

2人は話しながら家にかえった。

スバルの家の前に着くと

「じゃあな」

「うんバイバイ、ちゃんと調べてみるね

「おう、頼む」

そうして2人は別れた

part2 神の指輪（後書き）

やっと第一部ができました
第三部はこいつになるかわかりませんが楽しみに待っていてください
!!

part3 会議（前書き）

なぞの老人に光る指輪をもらつたスバル
さてその指輪の意味とは・・・

スバルはサクと遊び、つかれきって飯も食べず眠りについた

次の朝

スバルは起きると太陽が差し込んでいた

「うわあ、まぶし」

スバルは着替えて布団をたたむと、居間では会議の準備をしていた

スバルは朝ごはんを食べるため、台所に行つた

「おはよう、何か張り切つているね、お父さん」

スバルはご飯を作つていた母にゆつた

母もゆつた

「そりやそうよ、スバルの将来が今日決まるんだから・・それよりご飯食べなさい」

今日の朝ごはんも和風だつた

いつもどおり魚の骨間で食べ終わるとお父さんが

「おっ、スバル、おはよう。そろそろ会議を始めるから顔を洗つて

きなさい」

スバルは「はーい」といつて顔を洗い居間に行つた

「スバルが来たから、居間から会議を始めるぞ」

父がそうゆつた

あたりの空気がしーんとなつた

「えーっと今回の会議の内容だが、明日のスバルの誕生日だ。やつと15歳になる。15歳とゆうのはしってると思うが、手に職をつけなければいけない年だ。だから今から将来のスバルの職について話し合おうがいいか?」

「はいはい、わかってるよ」

兄が疲れたようにいった

「といっても、手に付ける職は大体決まっている。1つ田は、この神社を継ぐためにここで働く。2つ田は、旅に出る以上だ。他に何があるか？」

「ないな」「そうねないわね」「ないのぉ」

兄と母どじいちゃんはそうゆつた。

「じゃ話は早い、今から多数決を取るが、スバル何か無いか？」

スバルはものすく緊張した。

「ないよ」

（こよいよ決まる明日から新たな一日が始まるんだ・・・）

「じゃ多数決をとろ・・」

父がそついいかけたとき

「ちょっと待つのじや」

じいちゃんがそうゆつた。

「スバル、お前の左手についてるその指輪は、ビニで手に入れたのじや？」

スバルの耳元で、驚くようにじいちゃんがそうゆつた。

「どこでって、昨日、野蛇草原の竹やぶの中の家の人に、継承者がついに来たーみたいなことゆられて、もらつたんだよ

「何？継承者？」

じいちゃんは困った顔をすると、大きな声で言つた

「ちょっとスバル、外に出なさい。後、会議は一時中断じや」

スバルはじいちゃんにゆわれたとおりにしぶしぶ外に出た

「いいか、今からゆつたことをするのじやぞ、口答えもなしじやぞ。いいか指輪を付けた手で、地面に手を付けて『インパクト』とゆうのじや。簡単じやろ」

スバルは色々反抗したかったけど、止めてその代わりに、ため息をついた

「わかつたよ　じゃいくよ」

スバルは手を地面につけて『インパクト』といった
そうゆうと指輪からものすごい威力が伝わってきた
地面には半球の跡がついていた

「なつ何だこれ！！！」

スバルは今日第一回目の腰が抜けそうになつた

「その指輪はの、神の指輪とゆつての、神の指輪に選ばれたもの
にしか使えん特別な指輪なんじやよ」

「おじいちゃん知つてるのこれ？」

「知つてるも何もその指輪はわしの親友が残していつたものなんじや」

「は？」

「は？ではないその指輪は親友が残していつたものなんじや」

「は？」

「じゃからは？ではない。わしの親友が、旅人の終止符を打つため
に人にやつたのじや。でもこれで、スバルは旅を出なればならん
ことになつたのじや。ほれ、家の中に戻るぞ」

スバルとじいちゃんは家の中に戻つた

家に戻ると、兄はダララーとしていた。でもすぐに止まつっていた
会議が始まつた

「どこに行つてたんだ？」

兄がそうゆつてきた

「それはわしが説明しよう。スバルは旅を出ることに決まつた以上
じゃ」

「なんですか？とおさん？」疑問風に父がじいちゃんに聞いた

「ほれ、スバルの左指を見ればわかる」

父はふつと、スバルの左手の指輪をみると

「そうか、そうゆうことか。分かつた、スバル頑張ってきなさい」と父がゆつた

スバルはキヨトンとした

「意味がわからんねーよ」兄がそうゆつた

「意味はな、スバルは神に選ばれた、それだけのことだ」

じいちゃんが兄を説得するよつにいった

「何で神に選ばれたんだよ？運動しかできないスバルが、何でだ？」
じいちゃん

「神に選ばれた理由は誰も知らなんのじやよ。知つてるのは神のみじや。選ばれる人は100年に15人選ばれるらしい。スバルは、その一人に選ばれたとゆうことじや。選ばれた人は絶対に、旅に出なければならんのじや。そして、神のいる場所に行かなければならんのじや。だから、旅に出なければならない。それでスバルを旅に出すといふことじや」

兄は、まだ納得はしてなかつたみたいだけど、座り込んだ
スバルはさつきじいちゃんがゆつたことで気になることがあつた
「ねえじいちゃん、聞きたいことがあるんだけど、どうしたら、神
のいるところにいけるんだよ？」

「神のところには、わしの親友のゴルゾがしつておつたかもしれん。
あいつは、本が大好きじやからの。旅に行く途中、モリビアの街に
いつて、ゴルゾに聞きなさい。ゴルゾ宛に手紙を書いとこつ」
「いつ旅に出ればいいの？」

「明日じや」

「明日は早いよ」

「何が言おうとも明日じや」

スバルはため息をついた

「じゃ今から、荷物をまとめてきてやう。スバルはそれまで、どこか行つて追つていいくぞ」

(何か邪魔者みたい)

「わづかたよ、じゃサクのところに行つてくる・・・そうだ、一緒にサクも旅に連れてつていい？」

「それはスバルと同じだよ。スバルも昔この僕たちのすんでいたところが魔物に襲われたことくらい覚えてるでしょ」

その襲われたときにサクのお母さんとおねえちゃんが亡くなつた。それ以来サクは魔物が怖くなつていた。

「確かにあれは俺たちが5歳のころのことだからよく覚えているよ。あの魔物のせいが多くの人が多くなつた。俺のばあちゃんもなくなつた。けどさ、その魔物がきても追い払えるくらいになつとけば、この村で死者も少なくなると思うんだ。俺も旅に出るのは怖いし、かつてに旅に出るつてゆわれたけどさ、誰も死ななくていいよう、強くなればいいとおもうんだよ。だからや、サク一緒に旅に出ようよ」

サクは黙り込んでしまつた

「少し時間をちょうだい。ちゃんと明日には返事を出すからや。」

そうゆうとサクは自分の家に入つていつた

「わかつたまつてゐるぜ」

スバルはそうゆうと、サクの家を後にした

part 3 会議（後書き）

やつと第三部です
さて今回の話は会議です
さてその会議の意味とは・・・

part 4 準備（前書き）

いよいよ準備に入ったスバル
鞄に色々詰め合わせ旅に出る用意をした
さていよいよ旅か・・・

夜

スバルの家では旅の準備が始まっていた

「よいなスバル。この袋は木の実などが入つてある。そして、この本とペンはお前が書いたことが、わしが持つておる、この同じ本にかかる。何か旅の途中に聴きたいことがあれば書くといい。そしてこれは・・・なんじやつたかの?」

「それは、ゴルゾさんあてに書いた手紙でしょ」

父があきれたように行つた

「そつそうじやつたの、別にわざとボケただけじゃ

じいちゃんの額には冷や汗をかいていた

「」の手紙を、モリビアの町に図書館がある。そこにおるゴルゾつて言ひ人にこの手紙を渡しなさい。力になつてくれると思つぞ!――

「おう、分かつた。てかさ、モリビアの街つてどこにあるん?」

「ここから3~4時間くらい歩いたところじゃ。魔物もあるからきをつけていくのじやよ」

「うつうん」

スバルは魔物にびびっていた

「そういえば、サクはまじうするつて言つておたのじや?」

スバルは振り向くと

「えつ!まだ分からないつて。明日には返事出すつて・・・

「そうか・・・おつと、そうじやつた、これは魔物にあつたとき用の剣じや。スバルが練習の時に使つていた剣じや。使い慣れているじやろ」

「え――!じこひやん、旅に出る時はじこひやんの「時凧」^{ときなぎ}くれ

るつていつてたじやん

「まだスバルはお子ちゃまじゃからまだやれんの」

スバルはじいちゃんが使つていた『時風』がかっこよくて代々受け次がれていく物らしく

スバルの父はじいちゃんが剣の稽古を付けたらしきけどある病氣にかかるて剣の修行をやめたらしい。だからスバルの父は剣をつけなくてスバルに回つてきたりし

「じゃどうしたらくれるんだよ」

「それは・・・兄のランと勝負をしてもらひ」

スバルは驚くように

「でつでも兄ちゃんは剣の修行とかした事ないよ」

じいちゃんは頭をかくと

「じゃからスバルに一回でも攻撃くらつたら負けとゆうルールでじや

「あつそつかめんめんむきになつて」

「わかればよろしく」

「じゃいつはじめなんだよー!?」

じいちゃんは二口と笑うと

「今日の夜じやい的な

「おひ、わかつた」

「スバル」

声が聞こえるとお母さんが袋をもつていた

「これももつていきなさい」

スバルは袋の中を開けると木の板が入つていた

「これ何?」

「これは官印といつてね、彼方のおばあちゃんからもつたものなの。お守りとして持つていきなさい。それと、それは色々な街や国でつかえるから大事にするのよ」

「うん、大事にするよ」

そうゆうと官印を袋に直して鞄に入れた

「これで全部じゃの ジヤ後は夜になるだけじゃ」

じいちゃんが眠たそうにいつた

part 4 準備（後書き）

やつと本編に入れそうです
早く旅が書きたいので頑張ります

part5 時凪（前書き）

時凪の跡継ぎで戦うことになったスバルとスバルの兄さて戦いの行方は・・・

夜

スバル一家の男子勢は庭に出ていた

「いよいよじゅの」

「じいちゃんは何か一〇一〇している

「そうだね、でも兄ちゃん戦えるのかよ?」

兄は振り向くと

「久しぶりだからわからんねえけど、まあできるだろ」「えつ兄ちゃん稽古したことあるのかよ?」

「まあな。いちを兄だしな」

「意味わかんねえよ」

すると父が手をパンパンと叩くと

「はいそこまで。後はこの後の楽しみで」

「そうじゅの、そろそろ始めるとするかの」

「そうゆうとじいちゃんは半径一〇mくらいの大きな円を地面に書き始めた

「一人とも木刀を持つてきなさい。あと準備運動もしつかりしどくように」

父が腕を組んでそうゆった

「おう、わかつた。でもこんな兄すぐおわるぞ」「スバルは兄に対して挑発をした

「おいスバル、その言葉そのまま返すぞ」

兄も負けずといった

「まあ早く木刀を持ってきなさい」

2人は声をそろえて

「わかつたよ」といった

2人は木刀を持ってくると地面にはきれいな円が書かれていた

「おつ来たな。じゃはじめるぞ」

「そうじやの準備はよいな?」

「おう、ばっちりだよ。まあ、すぐ終わるさ」

「ゆつてくれるな、でもお前一撃でもくらつたら負けだぞ」

「知ってるよ」

「じゃそろそろ始めるかの、2人とも円の中に入りなさい」

2人は円の中に入った

「この円から出たら負けじや、それとスバルは一撃でもくらつたら
まけじやいいな」

スバルは息をスワーーと吸うと

「おし、いくぜ」

スバルは気合を入れた

「俺もやるか」

兄も気合を入れた

「それでは、はじめ!!」

スバルは行き良いよく向かつて行つた

兄も向かつていつた

スバルと兄の木刀が触れ合つた

2人は木刀で押し合つた

「久しぶりだから力がはいんねえ」

兄は歯を食いしばると木刀で振り払つた

スバルは木刀を引いて態勢を整えて、すぐ兄に向かつていつた

2~3mは飛んでいた

「ジャンプ力すげーな」

兄はスバルを見ていた

「じゃ次俺の番だな」

兄はスバルを見ていた

スバルは握つた木刀を横向きにして顔の前に持つてくれるといつくぜ、影討

スバルはすつと消えた

「何?」

兄は辺りを見た

でもスバルの姿はなかつた

「ここだよ」

兄は声のほうを見るがどこにもいなかつた

「こっちだつて」

兄は後ろを見るとスバルがいた

スバルは木刀で兄の首本を叩いた

兄はそのまま気を失つて倒れた

「勝負あり!! スバルの勝ち!!」

じいちゃんは大声で言つた

父は兄の近くに行くと

「おい大丈夫か? 蘭?」

蘭とは兄の名前である

「んつん痛ててて」

父は倒れた兄に肩を貸して家の中に入った

「よくやつたなスバル」

「まあ余裕だよこれくらい」

「そうじゃの。ほれこれをもつていきなさい」

じいちゃんはスバルに『時凧』を渡した

「へへ、ありがとな、じいちゃん」

時凧を持つと何かいい気分がした

時凧の鍔^{つば}にはとても美しい狐か彫られていた

「なあじいちゃんなんで狐なんだよ?」

「さあのはなぜじやかの」

じいちゃんは知らなかつた

「まあ良いではないか」

「やうだね。ふあ～ねむ」

「やうじゅのそろそろ寝るとするのかの」

スバルとじいちゃんは家の 中に入つて眠りについた

part 5 時風(後書き)

後1話で旅に出れそうです

part6 旅立ち（前書き）

兄との決戦を追え、旅立つことになつたスバル。
家族に最後の別れを告げ旅立とうとしたとき・・・

朝

「スバルおきなさい」

母の声で目が覚めた

目を覚ますとまぶしい日の光が射してゐる

スバルは起きて階段を駆け下りた

左手には「打の指輪」がついている

居間には兄以外全員いた

スバルは「ご飯を食べている途中スバルはふと思つた。『ご飯を食べるのはこの日が最後だつてことに・・・』

「おかあさん、おかわり！！」

「あら珍しいわね。スバルがおかわりだなんて・・・」

「まあね」

スバルはちょっと悲しかつた

でもスバルは「ご飯を食べ終わると

「おいしかつたよおかあさん」

といつてスバルは食器をかたづけた

「スバルそろそろ旅立ちの日じゃぞ」

じいちゃんたちは外へ出て行つた

「よいよ旅たちの日が迫つた

スバルは鞄をかるい、腰には時凧をさした

スバルは外に出て行つた

そこには昨日まで伸びていた兄が、父の方を借りて来てくれていた

「頑張つてこいよ」

ちょっと嬉しかった

じいちゃんたちも

「頑張るのよ」

「頑張つてきなさい」

「頑張るのじやよ」

といつてくれた

「うん、頑張つてくれるよ」

スバルは最後の別れを告げ、行こうかなつと思つたとき

「スバル――――――！」

と声が聞こえた

スバルは後ろを振り向くとサクが走つてこちらに向かつてきました
「サク！！！ その格好はもしかしてついてくれるのか！？」
サクの格好は肩がけ鞄に紋印術を書くための杖を持つていた
サクは照れたよう

「スバル一人だつたらさすぐやられそつだからさお共してあげるよ。
おまけにまた魔物が来ても追い返せるように強くなりたいからさ・・・

・

「サク・・

「よかつたのスバル2人で頑張つていいくのじやぞ

「うん」

「サクもスバルをよろしく頼むの・・・」

じいちゃんの顔には涙が今にもこぼれそうだった

「じゃ行つてくるよ」

スバルとサクは走つて自分たちの故郷を後にした・・・

part 6 旅立ち（後書き）

いよいよ旅立ちます

次の話からは待ちに待つた旅編です
どうぞ楽しみに待っていてください

part 7 サクの力（前書き）

いよいよ旅に出たスバルとサク
スバルがサクに気になることは・・・

part 7 サクの力

2人は出発して話しながらモリビアの街へ向かつた

「なあサク紋印術つてどんな感じなんだよ」

スバルは聞いた

スバルはこの10年近くサクと遊んだりしたが、サクの紋印術は

一度も見たことはない

「どんなつて・・・そうだね今度から一緒に旅をするんだから教えても良いね」

スバルは頭の中で紋印術を想像した

(きっとこうなんかドーンとかバーンとかなるんじゃないかな)

意味がよくわからない

「そうだねどこから話そつか。紋印術つてのは精靈とかと契約をして、その精靈の能力出す『紋もん』をそれにあつたように書くとそれなりのことができるってな感じかな」

「・・・・・・・・・・・・」

「スバルわかつた?」

「・・・・・・・・・・・・」

「わからないみたいだね まあ見せてあげるよ」

ちょっと自慢そうな言い方だった

そうゆうとサクは右手に持っていた杖で直径1mくらいの円を書いた

いた

「これが主になる円(別名 陣)この中に色々書くんだよ」

サクは円の中に『▽』を書いて、さらに△の真ん中の線が無いやつを重なるように書いた

「これが氷系紋印術『ソルド』だよ」

サクは円の中を軽く叩いた

そうすると円の周りから凍つていった

「つおーーすげー」

「まあこんなのが紋印術だよ」

「ほかにはねえのか?」

「他つてもう書かないけど、火の『プロミニネンス』 炎の『コロナ』

大地の『メザイア』

水の『レイラ』 引力の『スーラ』 セツを使つた氷の『ソルド』
そして最後に光の『ミーナ』があるよ」

「へえすごいなお前。でも、火と炎つて一緒にやねえのか?」

「違うよ。火より炎のほうが階級が上なんだ」

「階級?」

「これは簡単に言えば威力の違いだよ」

「へえお前、紋印術使つているとかっこよく見えるな。いつつもスースー寝ているから勉強しか出来ないと思つたけどよ。色々できるんだな」

「余計なお世話だよ。それより早く進まない?日が暮れたら魔物がいっぱい出てくるし、スバルもゴルゾつてゆうひとにも会わないといけなんでしょう」

「そういうえばそうだつたな。じゃいくか」

2人はモリビアの街へ向かつた

3時間半ほど歩くと、街らしきものが見えてきた

「おいアレジやねえか?」

「たぶんね」

2人はついにモリビアの街に着いた

part7 サクの力（後書き）

やつと旅編です
やつと書けるのでとてもわくわくしています
どうぞお楽しみにーーーーー

part 8 モリビアの街（前書き）

旅に出たサクとスバル。サクの能力を見たスバルはとても驚いた。だが2人はついに目的地のモリビアの街についたのであった。

part 8 モリビアの街

モリビアの街

「ソノガモリビアかー」

モリビアの街は白を強調とした街で、中心では10~20メートルあるかもしれない噴水があり、そこから水が流れていって、とてもきれいな街だった

「きれいなところだね。ここで昼寝したいよ」

「おいおい、それよりまずは図書館探して、『ゴルゴさんに会おうぜ』

「わかつてゐよそれくらいスバルに言われなくとも」

2人は人に聞きながら図書館を探した

「すいません図書館はどこにありますか?」

サクは親切な口調で女人に聞いた

「図書館ですか?・・・図書館はここから右に行つて、真直ぐに行つたところに『デカイ家』が見えます。その左進むと見える木造の家が

図書館ですよ」

「どうもありがとうございます。それでは・・・」

サクの笑顔で、女人人は一〇と返してくれた

スバルたちは聞いた通りに進んだ

「でかい家つてどれだよ」

「たぶんこれだよ。ここを左にいつたらあるんだつたんだよね
「たぶんな」

進んでいつた先には女人がゆつたとおり木造の家が立っていた

「これが？」

「たぶん・・・」

その家はつたが絡んで緑と茶の2色しかなかつた

「はいるんだよね？」

「なにビビッてんだよ」

「別ビビッてはないけどいやな感じがするんだよ」

「ぐずぐず言わないで入ろうぜ」

スバルたちは木の扉を押して入つた

「こんにちは。ゴルゾさんいますか？」

中は本本本本でいっぱいだつた

でも思つたより明るく、人も何人かいだ

「あのーすいませんがゴルゾさんはどちらにいますか？」

本を読んでいた人に聞いた

「ゴルゾさんですか？たぶんそここの扉の中にいると思つけど・・・」

2人はいわれた通りちょっとこぎれいな扉を開けた

するとそこには黒いひげを生やしたおっさんがいた

「あのーゴルゾさんいますか？」

「ゴルゾは俺だが」

ちよつとスバルはびびつた

だつてじいちゃんももうすぐ90歳なるからいかのきわどい

所なのにそのじいちゃんの友達が3~40歳のおっさんだつたなんて

「俺になんかようか？それにここの人間じゃないな」

スバルは肩にかけてあつた鞄を下ろしてじいちゃんからもらつた手紙をゴルゾさんに渡した

「なんだこれは？」

「えつとまあ よんでぐださい」
ゴルゾは手紙を読み出した

読み終わると

「なんだお前シラギの孫か」
シラギとはじいちゃんの名前だ

「はい」

「この手紙によるとお前『神選』に選ばれたらしこな

「神選?」

あまり聽かない言葉だった

「神選とか聞いてないのか?」

「はい、まつたく」

「シラギの奴俺に押し付けたな・・・まあいい」

「神選=お前みたいな神に選ばれた奴だ」

「それなら知つてます。10人しかいないんですね」

「ああそうだ」

「そりいえば、お前この手紙に書いてあつたが何か聞きたいことが
あるのか?」

「ゴルゾはひげを触りながらきこいた

「あつそりだつたこの指輪なんですか?」

「おお懐かしいなそりいえば『そつしょつ総将』の奴元氣にしてやがるかな

「あのお~昔話は良いですから教えてもらえませんか?」

「そりだつたな。指輪は今この世界でなかなかない代物だ。お前の
指輪は『打の神』がやどつている指輪だ。もつ能力は使ってみたの
か?」

「はい、家でじこせんに教えてもらいました」

すると

「あのー僕そつちで本読んでいいですか?」

「いいとこでサクが口を挟んだ

「おういいぞ何か読みたい本はあるのか?」

「えーっと紋印術の本はありますか?」

「また懐かしい本だな。その本だつたら管理人に『ゴルゾが特別室をあけろって』ってゆわれたって言つとけえそしたらかしてもらえるからよ」

「ありがとう」ゼコます。じゃ僕はここで」

サクはでていってゴルゾとスバル2人きりになつた

「えつとどこまではなしたけ?」

「えーとどこからだつけ?」

「えへつへへへへ」

「はははははは」

「・・・・・・・・・・

「本当にどこからだつけ?」

「えーと打の神の能力の話の途中からだつたよな」

「お前はシラギにどこまで教えてもらつたんだ?」

「えーと発動させるには『インパクト』これだつてゆわれました

「ほーうそこまでか。なあスバルちょっと俺と手合わせしてみねえか?」

手合わせとはまあ簡単にゆうと軽い決闘みたいな感じだ

「手合わせですか? いいですけどゴルゾさん武器持つてるんですか?」

「?」

「武器か? お前くらいだつたら武器なしで勝てるが手加減されるのが嫌いなんだつたら武器も持つてくるけどどうするか?」

「武器か? お前くらいだつたら武器なしで勝てるが手加減されるのが嫌いなんだつたら武器も持つてくるけどどうするか?」

「手加減されるの嫌いなんで武器持ってきてください」

「そうかじやつ持つてくるが念のためにお前の相方もつれてきてく

れ」

やうゆうヒゴルゾさんは外に出て行つた

part 8 モリビアの街（後書き）

投稿が遅くなりました すみません
さあいよいよモリビアの街につきました
次の話はまた戦いの話になるのでしょうか・・・

part9 はじめなサク（前書き）

やつとモコビアの街についた、スバルとサク。
図書館に行き、ゴルゾと会い、色々なことを聞いたスバルだった。
ゴルゾは手合わせがしたいといい、することになったスバルだった。

スバルは「ゴルゾさんにやわれたとおりに図書室にいるサクを呼びに言った

サクは本棚の近くにいた

「おーいサク今からゴルゾさんと手合わせするんだけど、ゴルゾさんがつれてこいつてゆ

われたからやついてきてくれよ」

サクは読みかけだつた本を閉じると「ちよつと僕も頼みごとがあるから良いよ」

スバルはちよつと驚いた

なぜかとゆうとサクがものすごくまじめだったからだ
いつもはふにゃふにゃしてゐるサクがとてもりりしい顔をしている

からだ

「どうしたんだサク? りりしい顔して」

「ちょっとね。それより早くゴルゾさんに会えないのかな」

そのとき、ギギイーと扉が開いた

「スバルいるか?」

大きな声だつた

「館長静かにしてください」

受付に座つていためがねをかけた女性が言つた

「おおすまんなりリア」

「わかればいいんですね」

リリアさんはため息をつくと椅子に座つた

「スバル来い」

「だから静かに!!!!」

リリアさんが切れた

「すまん」

「ゴルゾさんが腰に引かれているようだつた

「スバル行こうよ、はやく」

「そうだな、じゃいこうか」

2人は扉近くにいたゴルゾさんのところに立つた

「またせたな、じゃいくぞついてこい」

「ゴルゾさんにについつていつた先は木も家もない土しかないグラウンドだつた
「ちゃんと相方も連れてきたなそりいえば相方の名前はなんてゆん

だ」

「僕の名前は高上 桜です」

高上桜とはサクの本名でだ。

俺は桜の上の2文字を取つてサクといつてい

「高上？・・・高上桜だな」

「はい、あつそつだつた、僕お願いがあるんですけど、さつき借りた本をもらいたいんですけどダメですか？」

「そうゆうつと思つたよ。だからお前を連れてきてもらつたんだ。あの本は気に入つただろ」

「はいとても。でもあの本はタダではくれないとゆうことですね」
サクは真剣な顔だつた

「おひ、お前賢いな。そつだ簡単には本はやれないな。まあなに安心しる、あの本は値打ちが高くてな、軽く100円万以上の価値がある本だからな、払えつてゆわれても払えなう・・

「100万円！！！」

スバルの目が¥に変わつた

「こひ人がしゃべつてゐるとき口を開けむな
「はーい」

「えーと本をどうやつたら手に入はいるかだつたよな。まあとつても簡単なことだ今からスバルと手合わせするがそのなかに桜、お前

もはいれ。まあよつするに2対1つでことだ

「手合わせの中に入ればもらえるんですか？」

「あ、そうだった。手合わせの中でどっちかが俺に傷つけるか、3

0分内でお前たちが気絶しなかつたらお前にやるよ」

サクは二口一口して

「本当ですか？それだけでいいんですね」

「ああそうだ。なら話が早い。お前たち構えろ」

「ちょっとまって」

「わかつた3分間やる 作戦でも考えろ」

サクがスバルの近くにきた

「スバル、あの本は絶対に手に入れたいんだよ。だから本氣でいく
よいいね。あと僕は遠距離でサポートするからさスバルは接近でが
んばってね」

サクの目は本気モードだった

スバルもあんなにまじめなサクを見るのは初めてだった

「おおおおお」

「なんだよ、いつものスバルでおつてよ。いつも気が狂いそうにな
るからさ」

「だつてお前がまじめだからさ」

「おーいもういいか俺短気なんだよ」

「それじゃがんばろうね」

サクは手を振つてゴルゾさんとのこりにいった

「何か調子狂いそうだぜ」

スバルはボソッと言い捨ててゴルゾさんのとこりにいった

「じゃはじめるぞ。10秒後俺がコインを投げる地面についたらは
じめだいいな」

「はいわかりました」

「おうわかつた」

「じゃはじめるぞ」

「 1、 2、 3、 4、 ··· ···」

サクは遠くに走った

スバルはサクとゴルゴさんの中間くらいにたつた

「 8、 9、 10 ピーン」

コインをはじき、地面に着いた

part9 もじめなサク（後書き）

遅くなってしまったが、あけましておめでたし! やってます。今年もよろしくお願いします。

次の話は「ゴルゴとの戦い」の話になっちゃうです。

part10 手合わせ（前書き）

モリビアの街についたスバルとサクだったが、ゴルゾと手合わせをすることになった。

サクは図書館で見た本はどうしてほしくゴルゾに頼んだが、はたして本わもらえるのか？そしてゴルゾに勝てるのか？

「コインが地面についた瞬間にスバルは腰に付けてあつた時凧を抜いた

「じゃまずは小手調べ」

するとスバルはゴルゾに向かつて一直線

「ほお真正面からか。まあいい来い」

スバルはゴルゾに向かつて剣を振った

ゴルゾはひよいひよいと簡単によけてしました

「剣の振りはまあまあだな。だかこれだけじゃ負けるぞ」

「うるせえ、まだまだこれからだよ」

だがゴルゾはスバルを持ち上げると、遠くへ投げ飛ばした

するとサクが

「僕を忘れないでくださいよ」

こん

サクは紋印術の上を軽くつついた

「くらえ『コロナ』」

コロナの紋印術は陣のなかに『+』みたいな形が描かれていた
サクの描いたコロナの紋印術の中から火の玉が出てきた

その火の玉はどんどん分裂していった

ゴルゾは動く気配は無かった

「すげー」

スバルがゆつた

そして火の玉が50個くらいになると

「行け、コロナ」

サクがそうゆうと火の玉は、ゴルゾに向かつていった

だが、スピードはあまり速いとはいえない

「何だこのしょぼい技は」

「しょぼくないですよ」

「ゴルゾは向かってきた火の玉を避けた

「何だこれは？やつぱりしょぼいだろ」

「だから、しょぼくないですよ。後ろよーく見てください」

ゴルゾは後ろを見た

「囮まれているな」

「そこらへん、酸素うすくないですか？」

「そうゆわれると・・・薄いな」

「早く出ないと死んでしまいますよ」

サクの笑みはちょっと怖かつた・・・

スバルは、サクとゴルゾの戦いを見ていた

ゴルゾはポケットから手袋見たいのを出して、手につけた
「それでは、逃げますか・・・」

ゴルゾはボソと言い捨てると、ぶつぶつ何か言い出した

「外風の陣、いくつぜ」

ゴルゾの回りからものすごい風が生まれた

「はっ」

ゴルゾのまわりを囮んでいた火の玉が一瞬で消えてしまった

「嘘でしょ。一瞬で」

ゴルゾは唾を地面に吐き捨てた

「お前まだ甘いな、あと力がまだうまく操れていらないな、精霊と話したことはまだ無いのか？」

「何のことですか？」

「どううな

するといきなり

「影討イ」

そこにはさつきまでぼーっとしていたスバルが上に飛んでいて、大きな声とともに、ゴルゾに向かつて剣を振った

「なつ」

ゴルゾは驚くように急いで守りの体制に入った
スバルの剣がゴルゾに入るとゴルゾは軽く吹っ飛んだ
だが空中で体制を整えてまったくの無傷だった

スバルも空中で体制を整えて地面に着いた

「くつそ、あのままぶつ飛んどけば傷つけられて終わりだったのに。」

「やるなスバル。その技シラギのもんだる。久しぶりにその技くら
つたぜ」

「サクいつまでぼーとしてるんだ。早く紋印術描けよ。」

「まつてよ。今から描くから時間稼ぎしてよ

「わかった。はやくしろよな

「うん」

スバルは時凧を力強く握りしめた

「いくぜえ！……影討」

スバルは空高く飛び上がった

「懐かしいなその技、確かその技はジャンプをして自分の剣に乗り、
そこからまたさらにジャンプする、だから倍近くの跳力が生まれる。
だか跳ぶだけじゃ意味は無いぞ」

スバルは剣をゴルゾに向けて振った

「くらええ」

「じゃ俺も行くぜ！……俺流、真剣白刃取」

ゴルゾはスバルの剣を両手で取ってしまった

「まじかよ」

スバルは剣を抜き取ろうとしたがなかなか抜き取れなかつた

「これだつたら意味ないだろ」

「何で白刃取りをするんだよ」

「馬鹿か攻撃をとめたといえ止めたといえ」

「サクまだかよ?」

サクのほうをスバルが振り向くとゴルゾのパンチが飛んできた
パンチは穂に当たつた

スバルは10m位飛ばされた

「手合わせ中に敵から目を離すな!!!! 本当の戦いだつたらお前すぐ死ぬぞ、やる気が無いのなら指輪を捨てて帰れ!!!!」

「スバル!!!!」

スバルは気絶した

サクが心配そうに見ていると、ゴルゾがサクの後ろに素早く回りこんで来て、首の後ろをたたかれサクも気絶した
「はあやつぱりだめか・・・。」
「こいつら鍛えねえとあのときのことがまた再び起きてしまうかもな・・・」

ゴルゾは2人を抱えて日陰に運んだ

part10 手合わせ（後書き）

やつと一ヶタに入りました。
次の連載はまだ未定ですが、楽しみに待っていてください。

part11 前夜（前書き）

ゴルゾに負けてしまった、スバルとサクだった。
目を覚ますと辺りは夕方だった。

しばらく時間がたつて、スバルは目を覚ました

あたりは夕方だった

「いてここは・・・どこだ？」

隣には気持ちよくサクが寝ていた
するとゴルゾがスバルたちに来た

「おっおきたか」

「起きたけどここは？」

「お前、気絶して俺がここまで運んできちゃったんだ」

「気絶？俺が？」

「そうだ気絶だ」

（うあじこちゃんにきかれたら雷が落ちるだろつな・・・）

スバルはボソと言った

「そうだった、お前の荷物の中に通信本があるだろ？それをすまん
が出してくれ」

「通信本って何？」

「お前シラギからもらつただろ本を・・・」

「ああー！ー！」

スバルはちよつと近くにあつた荷物をとつてきて本を出した

「はいこれですか？」

「おおこれだこれちよつと借りるわ」

「別に良いんですけど・・・」

「じやすまんがちよつこりゃ席はずすわ」

「わつまつヒゴルゾは出て行つた

スバルはサクがおきるのをまつて
いる
でもなかなかサクはおきなかつた
サクは死ぬよにぐつすり眠つて
いた
スバルはちょっと悪戯いたずらしてやろうと思つた
「サ・ク・ね・ず・み・が・あ・た・ま・の・う・え・に・い・ま・
す・よ」

サクの返事はなかつた
ちよつとスバルはむきになつて、大声で言つた
「鼠！……！」

サクは飛び跳ねるように起きた

「スバル！……！鼠どこ？！」

サクはスバルにしがみ付いて聞いた

「嘘だよ、サク」

スバルは軽く笑つた

サクは怒つて杖を手に持つた

「馬鹿スバル」

サクは杖でスバルを殴つた

スバルはそのまま、倒れこんでしまつた

そのころゴルゾは自分の家に帰つて、通信本でスバルのじいちゃん
と連絡を取つていた
「久しぶりだなシラギじつはな……」

part11 前夜（後書き）

最近、勉強でなかなか更新できませんが、がんばっていきたいと思つています。

応援よろしくお願いします！――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0942d/>

神選～GotRing～

2010年12月25日18時29分発行